

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530778

研究課題名(和文) 精神保健福祉士の現任研修プログラム開発と普及 エビデンスに基づく達成課題と評価

研究課題名(英文) Development and dissemination of a social work assessment skills training program for psychiatric social workers: evidence-based action assignments and evaluation.

研究代表者

大谷 京子 (OTANI, Kyoko)

日本福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：90434612

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)： ソーシャルワークの要とされつつも、その概念も共有されておらず、方法論も明確ではなかったアセスメントのプロセスを明らかにし、そこで活用されるスキルを抽出した。スキル抽出にあたっては、クライアント目線から求められるスキルと、エキスパートが活用しているスキルの両方を統合して提示した。さらに、それらのアセスメントスキル向上のためには、クライアント理解のための仮説・検証・共有プロセスが中核になることを基に、これらのプロセスを遂行するためのスキルをトレーニングするプログラムを開発し、試行と修正を踏まえて完成版を冊子にまとめた。

研究成果の概要(英文)： The assessment process, which is assumed as the key to social work, was clarified. And moreover we extracted the skills utilized in each phase of the process. When skill extraction, we integrated the skills required from the client eyes, and the skills implemented by experts. We identified that the hypothesis - verification - sharing process is the key for holistic clients understanding and also for improving the assessment skills of social workers. Furthermore, we develop a program to train skills for carrying out these processes and summarizes the final version to the booklet based on the trial and correction.

研究分野：社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク アセスメント 精神保健福祉士 研修プログラム スキル mixed method

1. 研究開始当初の背景

日本の精神科病床の平均在院日数は世界的に見ても群を抜いて高く、病床数も多い。精神障害者が地域で当たり前で生活するという、言い古された、しかし未だに障壁が累積して達成が難しい目標を実現するためには、精神保健領域のソーシャルワーカー（以下 PSW）の実践力向上は我が国の喫緊の課題である。その PSW が国家資格化されて 13 年が経過し、養成カリキュラムが変更され、実習指導者研修が義務付けられるなど、専門職の質の担保に向けた動きは、国も、職能団体も、さまざまな方法によって展開している。今が PSW の質の向上にとって大きなチャンスの時であり、エビデンスに基づいた現任 PSW 研修プログラムの開発は必須課題であるといえる。

2. 研究の目的

個々のソーシャルワーカーの所属機関別、経験年数別といった属性に合わせた達成課題を明確にし、それを達成するための研修プログラムの開発・普及を目的とする。達成課題は、科研費基盤研究(c)「精神科ソーシャルワーカーの実践評価指標の開発」(2007-2009)において検証された、ソーシャルワーク実践遂行能力の属性による差を基礎としている。またここで得られた指標を、PSW 成長度評価指標として活用できるように改良する。

実践力の中でも、ソーシャルワークの中核とされているアセスメントプロセスに焦点を絞り、以下の目的を設定した。

(1)アセスメントプロセスの明示

先行研究では具体的な実践行為まで詳細に明らかにされていないアセスメントプロセスを解明する。

(2)アセスメントプロセスの各フェーズにおいて活用されるスキルの解明

プロセスの中でどのようなスキルが必要とされるかを明らかにする。

(3)初任者のアセスメントプロセス遂行における困難性の解明

経験年数 3 年未満の PSW は、どの程度アセスメントプロセスのスキルを身に着け、実践できているのかを明らかにする。

(4)アセスメントスキル向上のための研修プログラムの開発と普及

現任の PSW を対象にしたアセスメントスキルに焦点を絞った研修プログラムを開発する。

(5)アセスメントスキル評価尺度の開発

現任の PSW が自らの実践を省察できるような自記式の評価尺度を開発する。

3. 研究の方法

(1)アセスメントについての先行研究レビューを基に、アセスメントプロセスモデルを設定した。その上でアセスメントプロセスの解明を目的に、アセスメント面接面のロールプレイの参与観察と、それに続いてシンクアラウド法によるエキスパートインタビューを実施した。調査協力者として、経験年数 9 年以上のエキスパート PSW14 名には PSW としての面接を、経験年数 18 年の PSW にクライアント役のロールプレイを依頼した。

(2)アセスメントスキル抽出を目的に、上記調査で得られたエキスパートの面接とインタビューデータを M-GTA の分析ワークシートを用いて分析した。一方で、クライアント目線によるアセスメント面接に対する評価を明らかにし、求められるスキルを解明するために、クライアント役を担った PSW のインタビューデータをカードワークによって分析した。2 つの調査結果に基づいてアセスメントプロセスの各フェーズで活用されるアセスメントスキルを抽出した。

(3)経験年数 3 年未満の初任者 PSW6 名を調査協力者として、創作事例を用いたアセスメント面接のロールプレイを実施し、その場面を録音・録画した。音声データについて、逐語記録に起こし、内容分析を行った。分析は、クライアントの言動で引っかかった部分、PSW の言動で引っかかった部分、PSW の意図、考察、自分だったらどうしたか、の 5 点で検討を加えた。4 名の経験年数 10 年以上の PSW が別個に行い、それを照合して検討を加え、確からしさの担保にした。

(4)アセスメントスキル向上のための研修プログラム開発を目的に、研修プログラムの試行-改良を繰り返した。13 名の経験年数 4 年目から 10 年未満の PSW を対象に 6 回のコース、障害者領域の多職種 50 名を対象に 1 回、多様な背景を持つ対象者が集まる大学院のプログラムとして 2 回、現任 PSW12 名を対象に 1 回、プログラムを抽出し、改良しながら実施した。それぞれのプログラムについて、参加者から評価のフィードバックを受け、そのアンケートデータもプログラム改良のための分析対象にした。

(5)アセスメントスキル評価尺度開発を目的にアンケート調査を実施した。項目は、先行研究と質的研究の両方から収集し、プロセスの枠組みに沿って作成した。研修プログラム受講者にもプレテストを行い、項目を精選した。

データの分析は、Mplus Ver6 を使用し、項目反応理論を用いて回答者個々のスキルを明示できるようにする予定である。

4. 研究成果

(1) 先行研究の結果、ソーシャルワークの要とされながらも、概念も方法論も共有されていない現実を示し、ポストモダンに立脚したソーシャルワークアセスメントは、クライアントとの協働を志向すべきであり、そのための方法論と、到達目標として「アセスメント結果の共有」があることを論理的に提示した。

その上で、エキスパート PSW14 名によるロールプレイの参与観察を実施し、プロセスモデルを検証した(図1参照)。これまで、PSW

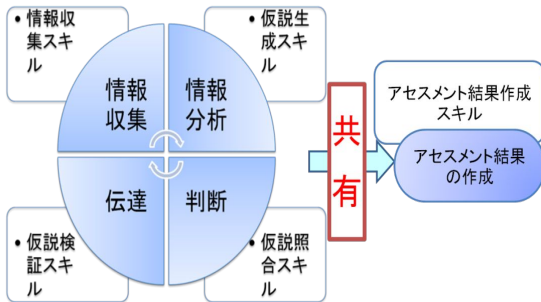


図1. アセスメントプロセス図

の思考プロセスであるとして明示されていなかったアセスメントプロセスについて、「仮説-検証-共有」という用語によって説明することができた。

従来、アセスメントは情報収集の後に位置づけられると考えられてきたが、ソーシャルワークプロセスを通して継続するものであることを明らかにした。また、PSW が理解するだけでなく、クライアントとの理解の共有がゴールであることも示した。つまり「真実」はソーシャルワーカーとクライアントが共有して作り出すものであり、ワーカーが一方向的に理解するものではないという、ポストモダンの考えに基づいた認識論を踏まえた方法論の必要性が示された。

本調査によって、今後の実践方法論の変革の必要性を示唆できた。さらに PSW の思考プロセスを可視化することで、実践において抑えるべきポイントを明示できた。本成果は、『日本福祉大学社会福祉論集』に2本の論文として掲載された。

(2) 上記のプロセスを明らかにした上で、それぞれのフェーズで活用されるスキルを抽出した。エキスパート調査によって得られたスキルは、28であった。この28のスキルには具体例として、エキスパートが実際に表現した語りや問いが挙げられているため、現任 PSW が即座に倣えるようなモデルとして提示できた。

また、面接技術や方向性の共有や介入といった、アセスメントスキルに包含されないスキルも、面接の中で同時に導出されていることが明らかになった。

一方のクライアント役の調査によって、クライアントのアセスメント面接に対する認識を9つのカテゴリーで整理できた。エキスパート調査と異なる点は、結果志向、クライアントの理解の優越性、情報探求の深度、共有志向であった。これらはソーシャルワーカーに価値志向を要求するものであり、コンピテンシーに属する要素であると考えられた。

以上の2つの質的調査から、28のスキルと、アセスメントプロセスに臨む際のソーシャルワーカーのあるべき姿勢・態度について明らかにすることができた。ソーシャルワーカーが思考プロセスとして行っているスキルを、具体的に細分化して視覚化することができた点と、「仮説・検証・共有」という一般的にイメージしやすい用語を用いてそのスキルを提示できた点が、本研究の意義であるとする。これらの研究結果は、『ソーシャルワーク研究』と『精神保健福祉学』に掲載された。

(3) 初任者はアセスメントスキルの特徴として、以下の5点が明らかになった。PSW の枠組みでスキルの査定を中心とした面接を展開すること、クライアントの言葉に対する理解についてクライアントの真意を汲み取れないまま、PSW の言葉で言い換えている(変換ミス)こと、クライアントが話したいことについて、避ける傾向があること、病理・欠損モデルにより問題を抽出し、ストレングスが意識できていないこと、状態原因という直線的理解となっていることである。以上の結果から初任者には、アセスメントの目的設定、スキルの視覚化、ソーシャルワークの視点や姿勢について、系統的に伝達する方法論が必要であることが示された。つまり、研修プログラムの焦点が明らかになった。本研究成果は『日本福祉大学社会福祉論集』に掲載された。

(4) アセスメントプロセスを、「仮説・検証・共有」という枠組みに基づいてスキルと共に講義し、それを演習形式で習得するというプログラムを開発した。

面接において表出される「話す」と「聴く」という行為の根底には、ソーシャルワーカーの思考プロセスがある。情報の重み付け、優先順位づけ、取捨選択、検証された情報の組み立て、ソーシャルワーカーの理解をクライアントと共有するための投げかけについて、具体的に方法を説明し、モデリングで示し、グループワークを活用しながら習得し、現場に持ち帰って実践する宿題を含めたワークプログラムを完成させた。これによって、不明瞭だったスキルの可視化、スキルの訓練、「理解できること」と「実際にやれる」こととの間の橋渡しが可能になったと考えている。

本研修プログラムはワークブックの形にまとめ、普及のために日本精神保健福祉士協会の生涯研修委員会と専門職団体の事務局

に配布するため、現在印刷中である。また研究成果としては、『日本福祉大学専門学校紀要』に掲載された。

(5) 質問紙を完成させた。現在、専門職団体に協力依頼中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 14 件)

大谷京子 (2015)「アセスメント面接に対するクライアント評価の探求 面接ロールプレイ分析」『精神保健福祉学』3(1)掲載予定。査読有。

田中和彦 (2015)「ソーシャルワークアセスメント-若手 PSW を対象とした研修プログラムの構想及び着眼点-」『日本福祉大学専門学校紀要』第 13 号, 29-38. 査読無。

大谷京子 (2014)「ソーシャルワークアセスメントスキル 面接ロールプレイを用いた質的分析」『ソーシャルワーク研究』40(3), 48-57. 査読有。

大谷京子 (2014)「ソーシャルワークにおけるアセスメント 態度とスキル」『日本福祉大学社会福祉論集』130; 15-29. 査読無。

田中和彦 (2014)「アセスメントプロセスにおける若手 PSW の困難さ-研修の方向性の模索-」『日本福祉大学社会福祉論集』第 130 号, 31-43. 査読無。

大谷京子 (2013)「ソーシャルワークにおけるアセスメント 研修プログラム開発の枠組み」『日本福祉大学社会福祉論集』129; 1-13. 査読無。

杉本浩章, 齋藤晋治, 田中和彦, 小松尾京子, 明星智美 (2013)「調査報告 実習プログラミングと実習評価に関する調査」『2012 年度社会福祉実習教育研究センター年報』第 10 号, 42-65. 査読無。

大谷京子 (2012)「リハビリテーション関係論への招待 ソーシャルワーク関係論 関係性と実践との関連」『精神療法』38(1), 101-110. 査読無。

大谷京子 (2011)「リハビリテーション関係論への招待 ソーシャルワーク関係論 パートナーシップ」『精神療法』37(6), 747-756. 査読無。

田中和彦 (2011)「精神保健福祉士が行う精神科予診のポイント-経験論的実践マニュアル-」『瀬木学園紀要』第 5 号, 54-58. 査読無。

大谷京子 (2011)「リハビリテーション関係論への招待 ソーシャルワーク関係論 関係性概念の変遷」『精神療法』37(5), 617-626. 査読無。

[学会発表](計 19 件)

大谷京子, 田中和彦, 寺澤法弘, 吉田みゆき「アセスメントプロセスに活用するスキルの検討 クライアントの主観に焦点を絞って」日本社会福祉学会第 62 回大会, 2014 年 11 月 30 日, 早稲田大学(東京都新宿区)。

田中和彦, 大谷京子, 寺澤法弘, 吉田みゆき「ソーシャルワークアセスメントプロセス研修プログラム開発-PSW 塾の取り組み-」日本社会福祉学会第 62 回大会, 2014 年 11 月 30 日, 早稲田大学(東京都新宿区)。

大谷京子, 田中和彦「ソーシャルワークアセスメントスキル エキスパート面接ロールプレイからの抽出」日本ソーシャルワーク学会第 31 回大会, 2014 年 6 月 22 日, 日本福祉大学(愛知県名古屋市)。

田中和彦, 小松尾京子「主任介護支援専門員のスーパービジョン実践に関する研究(2) - スーパーバイザーに焦点を当てて -」日本ソーシャルワーク学会第 30 回大会, 2013 年 6 月 30 日, 仙台白百合女子大学(宮城県仙台市)。

小松尾京子, 田中和彦「主任介護支援専門員のスーパービジョン実践に関する研究(1) - スーパーバイザーに焦点をあてて -」日本ソーシャルワーク学会第 30 回大会, 2013 年 6 月 30 日, 仙台白百合女子大学(宮城県仙台市)。

田中和彦, 大谷京子, 寺澤法弘, 吉田みゆき「アセスメントプロセスの解明-ベテラン PSW への探索的調査-」日本社会福祉学会第 60 回秋季大会, 2012 年 10 月 20 日, 関西学院大学(兵庫県西宮市)。

大谷京子「アセスメントプロセス解明のための探索的調査-初任者とエキスパートの比較-」日本社会福祉学会第 61 回秋季大会, 2013 年 9 月 21 日, 北星学園大学(北海道札幌市)。

田中和彦, 寺澤法弘, 大谷京子, 吉田みゆき「アセスメントにおける情報分析方法に関する探索的研究-若手 PSW に対する研修方法の模索-」日本精神保健福祉学会第 1 回学術集会, 2012 年 6 月 29 日, 北星学園大学(北海道札幌市)。

大谷京子, 吉田みゆき, 田中和彦, 寺澤法弘「[学会企画シンポジウム エビデンス再考] Mixed-Method によるソーシャルワーク研究」日本ソーシャルワーク学会第 29 回大会, 2012 年 6 月 10 日, 関東学院大学(神奈川県横浜市)。

大谷京子“Self-definition of social workers” and “perception toward clients” predict the social worker-client relationships in mental health: an empirical research” 第 21 回アジア太平洋ソーシャルワーク会議, 2011 年 7 月 16 日, 早稲田大学(東京都新宿区)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大谷 京子 (OTANI, Kyoko)
日本福祉大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：90434612

(2) 研究分担者

吉田 みゆき (YOSHIDA, Miyuki)
同朋大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：70445930

寺澤 法弘 (TERAZAWA, Norihiro)
日本福祉大学・社会福祉学部・助教
研究者番号：80548636

田中 和彦 (TANAKA, Kazuhiko)
日本福祉大学・福祉経営学部・助教
研究者番号：10440801
(平成 24 年度より研究分担者として参
画)